

フランス語、フランコフォニーの今日の課題： Jean-Marie Klinkenberg の著書より考える

小松 祐子
KOMATSU Sachiko
お茶の水女子大学
komatsu.sachiko@ocha.ac.jp

フランス語教員にとって、自分たちの教えるフランス語という言葉が今日のグローバル化された世界のなかでどのような位置づけにあり、どのような課題を抱えているのかを客観的に見きわめることはきわめて重要である。そうすることにより、日本の学習者がこの言語を学ぶ意義を考え、自分たちの行っているフランス語を教えるという行為が、現代社会のなかでどのような意味を持つかについても意識的でありえるのではないかと思われる。

そこで、2017年3月の Rencontres pédagogiques du Kansai で担当したアトリエ(のどくに前半)では、Jean-Marie Klinkenberg の著書 *La langue dans la cité - Vivre et penser l'équité culturelle* (Les Impressions nouvelle, 2015)の第3章「フランコフォニー：使命か、運命か？」を紹介し、フランス語、フランコフォニーの課題について考えた。

Klinkenberg 氏はグループμでの活動が知られる修辞学・記号学・文学・言語学の専門家で、ベルギー・リエージュ大学名誉教授であるが、フランコフォニー関係の要職を歴任し、近年この分野での活躍が目覚ましい。2016年7月の国際フランス語教授連合(FIPF)世界大会では大会組織実行委員長を務めた。2013年に来日し、日本フランス語教育学会春季大会や日仏会館でフランコフォニーに関する講演を行っている。

彼のこの本は言語政策、とりわけフランス語政策を考えるためのエッセーである。ベルギーで10年前から毎年開催されている La foire du livre politique で le Prix annuel du livre politique 2016 を受賞した(本人いわく、フランス語やフランコフォニー関係の賞ではなく、今回はじめて政策部門の賞を受賞したことが嬉しいとのこと)。現代社会のコミュニケーションや人間関係のなかで、市民のための言語政策、公平と正義を目指した言語政策がいかにあるべきかを問う示唆に満ちた本である。

フランス語の多元性とフランコフォニーの使命

フランコフォニーを扱う第3章は、フランス語の多元性を確認することから書き起こされる。「フランス語は今や多元的な世界の財産であり、結果的に多元的な言語となったということである。」そもそも「フランス語は、まずその形態から多元的」なのであり、「とりわけフランス語が表現しうる状況によって多元的」だからである。

次いで「フランコフォニーが統一体ではないこと」、「本質主義的言説や単一的フランコフォニー教義によって覆い隠されている力関係」があることを確認する。実際、フランコフォンには、母語話者、第二言語話者、外国語としての学習者、そして社会の多数派であるかいなか、などに応じて幾種類もの分類が可能なのであり、フランコフォンを一枚板の集団のように考えることには意味がない。

さらにフランコフォニーという概念のもつ曖昧さが指摘されるが（本章ではこの概念の歴史の変遷が丁寧に解説されている）、その後に彼は次のように問う。「フランコフォニーは何のためにあるのか。」「我々フランコフォンが共に行うことによって、より良い結果を出せるような何を行うことができるのか。」世界中のフランコフォンがフランス語に対して同じ懸念を持ってはいないことを認めたいと、フランコフォニーという仮想共同体に属する彼らがともに何かを行おうとしたら、何なのか。それに対する彼の答えは、「ただ一つだが壮大なこと、つまり世界の画一化と戦うということである」。つまり「多様性の擁護」がフランス語のメシア的な任務であると言う。これはフランコフォニー国際組織が自ら掲げる使命と一致している。

この使命は、フランス語が持つ重要な二つの特徴により正当化される。「一つには、近代性の表現を可能とし、他方では、まとめ役となるだけの力を持つと同時に、世界的な支配者とは（もはや）ならないという弱さもある」、このことから、「フランス語は戦略的立場を占め、議論の重要な役者となるのである」。

フランス語が自らに課すべき努力

しかし、フランス語が多様性擁護のために重要な役割を果しうるためには、まず自らに課すべき課題がある。この章の後半には「フランス語よ、多様性の言語となるにはもう一歩だ」という小見出しに続きその課題が示される。「フランス語が今日この戦いを続け、文化縮小の脅威にさらされた世界のなかで多様性の保証人となることができるとすれば、その役割を十分に演じるためにフランス語は複数の条件を満たさなくてはならない。多くの変化を自らに課さねばならないのである。」

こうして示される課題は以下の3つである。

第一の努力：中央集権と戦うこと

第二の努力：フランス語についての語りを変えること

第三の努力：他者の言語に対して自らを開くこと

それぞれの内容を以下に紹介しよう。

「中央集権と戦う」

第一の努力はフランス語が長らく伝統としてきた中央集権から脱するための努力である。「今日もなお、フランス語圏の文化、知識、文学の活動を統御する制度的機関のほとんどがパリに置かれている」こと、意識変革に時間がかかることを認めつつも、著者は次のような希望的兆候を指摘している。「しかしながら、一つだけは確実に言えることがある。動きは始まっているということだ。あちらこちらで、態度の目覚ましい変化や、フランス語の複数中心的概念が生まれつつあることを示す実践が観察されるのである。」その例として、たとえばケベックやベルギーでの独自の語彙政策の採用（職業名詞の女性化やつづり字改革）や辞書の地域語法掲載が挙げられる。

この現象を彼は次のように説明する。「ここに見られるのはむしろ矛盾をふくんだ弁証法的

な動きである。」「周辺部の話者は、中央の優越に進んで反抗し、かつて彼にとってスティグマであった自らの特徴のいくつかを引き受ける。しかし同時に、彼はあいかわらずパリを、フランス語がもっともよく話される場として示すのである。こうして、彼は同時に中央の規範への生真面目なリスペクトを保ちつつ、内因的規範の作成に参加することができる。」中央と地方との新たな関係が築かれつつあるというのである。

そして以下のような政策提言がなされる。「このようなグローバルとローカルとのあいだの弁証法を、とりわけ学校カリキュラムの作成者たちに対して奨励し、それが精神分裂ではないようにすること、それがフランス語圏公権力の使命である。」(我々フランス語教育に携わる者にも当てはまる提言ではないか。)

「フランス語についての語りを変える」

第二の努力はフランス語のイメージを刷新することである。フランス語の伝統的なイメージには肯定的な面とその逆とがある。洗練された言語は、美しいと同時に難しくもあるからである。「さまざまなアンケートが示すところでは、フランコフォンたちは一致して、フランス語について、調和がとれ、洗練されているが、変化を受け入れず、学習が困難で、使用者にとって扱いが難しい言語であると考えている。そして、よくあることだが、イメージが現実を作るのである。」

そしてフランス語教員にとって身につまされる指摘がこれに続く。「非フランス語圏世界のすべての学校で、フランス語の授業のレベルが、ドイツ語やスペイン語の授業のレベルよりも高く、それがフランス語にとっての新たな障害となっているということがある。そこには、フランス語が「優雅」「洗練」「伝統」といった価値と結び付けられているというイメージがある。(中略) ここで重要なのは、問題としたイメージがフランス語カリキュラムにとって特段の助けにはならないということを指摘することである。」

フランス語の持つ芸術や文学といった高級文化と結びついたエリート言語という伝統的イメージは、過去においてはフランス語を憧憬の対象として学習意欲を駆り立てるものとして機能した。しかし伝統の重みがむしろ学習者に敬遠されかねない今日、むしろフランス語は新たなイメージを自らに見出す必要がある。端的に言って望まれるのは実利であり、「『仕事や個人的成功のための言語』としても見られる必要がある」と彼は言う。

時代遅れのイメージに代えて新しい魅力的イメージを作り出していく必要があることは確かである。しかし、これまでに培ってきた肯定的イメージの伝統については、これを手放すことなく、新たなイメージと組み合わせることが大切とも彼は言う。「既得の評価を保ちつつ、フランス語をミイラ化するようなイメージを壊すような働きかけをすることである。フランコフォンが二重の遺産、つまりようやく価値づけされるローカルな遺産と、普遍的な遺産とを、(少々分裂症がかかってはいるが) ともに持つことを認識させ、安心させることである。」

「他者の言語に対して自らを開く」

第三の努力として挙げられるのは、「フランコフォンがときに陥っている矛盾から抜け出す」ことである。なぜなら、「彼らは自らのために文化的例外を要求しつつ、自分たちの戦いの相手であるはずの帝国主義者と同じようにふるまうのである。」ここではフランコフォンの無意識な身勝手さ、自己中心性が咎められている。

グローバル化のなかで(とくに英語に対して劣勢に置かれたゆえの) 守勢、自己保身の閉じ

た態度を、他者を認める開かれた態度へと改めることによって、結果として得られるものがあることが説かれている。「フランコフォンが英語に対して要求することは、自分も他者へ与えるべきではないだろうか。たとえばアフリカの諸言語が近代性を獲得するのを助けるといったことである。またたとえば、フランス語圏諸国において他の言語が話され、それらが存在価値をもち、生を表現するのだということを認めるべきではないだろうか。(中略)他の言語を守りつつ、自らの言語を守るということである。」

フランス語教員として受け止める

以上、Klinkenberg 氏の著書第3章の内容をできるかぎり忠実にまとめてみた。豊富な例証や軽妙洒脱な文章の魅力を伝えることができないのは残念である。しかし、フランコフォニーの文化多様性擁護という目標と、それを実現させるためにフランス語(関係者)に求められる努力についての著者の明快な主張は、つたない要約を通じても理解いただけるだろう。中央集権の強いフランス語世界のなかでベルギー人という周辺性を生き、ケベックへの深い理解と愛着をもつ(リエージュ大学ケベック研究センター長でもあった)著者ならではの視点がこの本の随所に感じられる。引用文中にもある「グローバルとローカルとの弁証法」という見立ても、フランス語圏世界の文化力学に通暁した彼の筆によると説得力を増すように思われる。

ここに詳しく紹介したのは、彼の「言語政策」上の提言は、フランス語教員の我々もこれを真摯に受け止める必要があると思われるからである。教師は、日々の授業運営・実践はもとより、組織内での調整その他に忙しく、言語政策上のフランス語の問題にまでじっくりと思いを馳せる余裕は(気になりつつも)少ないかもしれない。しかし、たとえフランス語圏から遠く離れた日本にあっても、私たちはフランス語普及の一翼を担う者であり、フランス語政策のなかに組み込まれた存在であることを自覚する必要があるだろう。学習者を中心に考えようとするならばなおのこと、そのような自覚は大切なのではないだろうか。フランス語が開かれた新しいイメージをもちその魅力を保つこと、それが学習者にとって重要なことであり、私たちフランス語教員にとっての大切な課題である。そのための提言を傾聴し、日々の実践に何らかの形で反映させていければと思う。